

むすび—今後の課題と展望

(1) 自己評価結果と今後の課題

本学は、この自己評価報告書でも示したように、社会的に課せられた諸課題に応えつつ、その理念・教育目的や諸方針の実現に向けて堅実な歩みを続けていると自負している。優秀な学生が集い、志願者数も一定数を維持し、意欲的かつ誠実に学ぶ学生たち、高いレベルで就職、四大への編入学を果たしていく卒業生たち、そんな姿を見ながら、日々の教育・研究に力を傾注している教員、人員削減という厳しい環境のなかで学生や教員の力強いサポーターであり続ける事務職員、それらが維持されているかぎり、本学は地域に根ざした公立短大としての使命を基本的には果たしえていると確信する。

同時に、この自己評価報告書でも明らかにしたように、こうした地道な努力にもかかわらず、なお弱点や不十分さを残していることもまた事実である。大学（短大）評価がその経験を積み、教育機関と社会の連携の新たなあり方が模索される時、学生やその家族のみならず、広く社会に本学の状況を広報し、情報を公開し、その姿をわかりやすい形で知っていただくことが必須となっている。

そのような分野で本学の取り組みの不十分さも、今回の自己評価活動によって見えてきた。改革改善の方向は、この報告書を公表の後に、また次年度に予定している外部評価を受けつつ、一つひとつの課題の解決、弱点の克服に取り組む必要がある。検討の対象は、理念・目的の明文化、各種ポリシーの明文化、それらを踏まえての学則等の基本諸規程の改正、学内運営機構図の作成などに及ぶものであるが、さしあたり想定しうる改革改善のための検討事項を整理しておきたい。

- 1) 現在の教育方針をカリキュラム・ポリシーとして再整理し、全学の教育目標との関連でそれを位置づけること
- 2) どのような学生を育てるかという点をより一層明確にし、ディプロマ・ポリシーとして再整理し、その周知を図ること
- 3) 以上の検討とあわせて、アドミッション・ポリシーとこれらのポリシーとの整合性を図ること
- 4) 単位の実質化と学修成果把握システムを学科ごと、年次ごとによりきめ細やかなものに仕上げること
- 5) 学生の卒業時の満足度、達成度、要望などの把握とともに、卒後のフォロー、支援についての検討を行い、具体化を図ること
- 6) 内部質保証システムの現状を整理し、外部からもわかりやすい形で再構築すること。特に、学科や委員会ごとに検討、作成している年度ごとの活動報告、活動計画の内容の豊富化、詳細化を図り、『地域年報』の内容の質的充実と活用の多面化を検討し具体化すること

- 7) より一層の社会への情報発信とアカウンタビリティの強化をはかりWebの充実・活用を格段に強めること
- 8) 以上の検討を経て、改めての短大・学科の理念・目的、教育目標等の見直しをはかり、その結果が大学案内、Webサイト、その他の広報、そして何よりも学内におけるガイダンス、学生便覧、シラバス等の充実・再編などに反映するよう務めること
- 9) 以上の諸点は、順次行われるべきものと、相互にフィードバックさせながらおこなわれるべきものが交錯しているため、最終的には8)の項で述べた短大・学科の理念・目的、教育目標、それに3つのポリシーの策定（再整理を含む）を機軸的課題として位置づけて行われるべきこと

(2) 短期大学をめぐる状況と本学の将来構想について

最後に、こうした短大としての充実・発展の方策を講ずることとあわせて考えておかなければならない問題も存在する。それは、短大としての本学の将来をどう展望するかという問題である。自己評価報告書ではあるが、そのことにふれないままにすますことはできない。

短期大学の在り方が問われるようになって久しい。現在、文部科学省においても中長期的な短期大学の在り方をめぐって新たな議論が始まっている。本学は、短期大学としてその充実を図ることを使命としつつも、制度としての短期大学の在り方をめぐる議論・動向にも無関心ではいられない。かつて60数校に及んだ公立短大は、いまや17校となっており、四大化の波は衰えていない。全国公立短期大学協会でも、本年度、全国的に公立短期大学の現状と課題を洗い出すべく調査研究を行うこととしている。

岐阜市においても、かつて四大化の方向を確認したことがあるが、諸般の事情から継続審議となり、市の重要課題検討事項のひとつとはされながら具体的な方向や検討の計画にまでは至っていない。

本学が、志願者、入学者、卒業者の動向や、教育活動の成果や教員の研究成果において、喫緊の課題とすべきものが眼前にあるわけではない。しかし、18歳人口の減少傾向や大学（短大を含む）進学率の動向などを見るにつけても、けっして安穩としていられる状況にないことはいうまでもない。そこで、本学では、将来構想委員会とそのワーキング・グループにおいて、短期大学をめぐる状況、本学の志願者動向、社会の変動などを継続的に調査検討し、短期大学としての充実策とともに、四大化という選択肢がある場合のありうべき大学構想をも視野に入れた検討を続けている。

短期大学はまぎれもなく一定の社会的評価を受け、社会のニーズに応じてきたし、その存在意義は今日もけっして薄れてはいない。しかし同時に、短期大学が確実に減少してきており、短大卒資格が就職活動においてもその後の社会活動においても、かつてのような意味を持ちえなくなっていることもまた事実である。現にニーズのある短期大学としてその充実策を講ずる責務を果しながら、同時に変化激しい高等教育をめぐる状況のなかで「乗り遅れない」こともまた必要となっている。こうした困難な課題に耐えうる道は、優秀な学生を受け入れ、育て、社会に送り出すこと、その教育を担保する教員の意欲的かつ継続的なたゆまぬ研究活動とその成果の達成以外にないであろう。本学は、その道を着実に歩み続けたいと思う。